

近世印刷本イソップ集の 本文と挿絵に関する一考察

——1610年刊行ネヴェレ本を中心として

吉 川 齊

1. はじめに

中世写本の時代から、イソップ集には挿絵が付されていることがしばしばある。挿絵は個々の話の特徴的な場面を画像化するものであり、読者が話を読む際のイメージ構成を助け、あるいは固定化すると考えられる。近世には、戦闘などの一般的な場面を描いた挿絵が再利用されることもしばしばあったとされるが¹⁾、イソップ集に含まれる話のように、個別具体的に作品として構成された物語に対して描かれる挿絵は、むしろ挿絵から話の内容を思い浮かべることがあるだろうし、本文テキストのいずれかの箇所に対応したものであることが期待される、とって問題はなだらう。たとえば、現在書店に並ぶ子供向けイソップ絵本などは、話の内容をふまえた可愛らしい絵柄によって、ともすれば本文テキストより先に読者の関心を惹くように工夫されている²⁾。

近世ヨーロッパで印刷されたイソップ集に目を向けると、揺籃期の1476年頃にウルムで刊行されたイソップ集（シュタインヘーヴェル本）で、170枚を超える挿絵が付されていた。シュタインヘーヴェル本は、中世に流布していたラテン語イソップ集（いわゆるロムルス集）を基礎とし、そのほかの小話集等も併せて編纂されたイソップ集で、全編ドイツ語訳が行われた点に特徴がある。さらに、シュタインヘーヴェル本は、1482年リヨン刊行のフランス語訳本（マショール本）や1484年ロンドン刊行の英語訳本（カクストン本）などに派生し、15世紀末までに各国に大きく展開することになる³⁾。

ところで、近世印刷本イソップ集でも最大のものと考えられるのが、

1610年にフランクフルトで刊行されたイソップ集（ネヴェレ本）である。ネヴェレ Isaac Nicolaus Nevelet 編によるこの集成は782話を含むものであり、イソップ集部分にはのべ230枚もの挿絵が印刷されている。しかし、その一方で、挿絵を全体的に眺めると、重複する挿絵が多く含まれることに気づく。確認できる挿絵のヴァリエーションは103種（と冒頭『イソップ伝』部分の挿絵との重複1種）であり、5回以上使用されている挿絵も複数存在する⁴⁾。挿絵は木版による印刷であり、版木の使い回しによって重複させること自体は容易であったと思われるが、このとき問題となるのは、図像と本文テキストの対応関係である。

ネヴェレ本の構成は以下のとおりである（丸数字は筆者による。本稿中の丸数字もこれに対応する。また、（ ）内の数字はネヴェレ本で個々の話に附された番号に基づく）。

AESOPI VITA

- ① ΑΙΣΩΠΙΟΥ ΜΥΘΟΙ. / Aesopi Fabulae. (1-149)
- ② Sequuntur Fabulae nunquam hactenus editae. (150-297)
- ③ ΜΥΘΟΙ ΑΦΘΟΝΙΟΥ ΡΗΤΟΡΟΣ. / Aphthonii Soph. Fabulae. (1-40)
- ④ ΓΑΒΡΙΟΥ ΕΛΛΗΝΟΣ τετράστιχα. / Gabriae Graeci Tetrasticha. (1-43)
- ⑤ Sequuntur Babriae Fabulae nunquam hactenus editae. (1-11)
- ⑥ Phaedri Augusti Liberti fabularum Aesopicarum libri. (1-90)
- ⑦ Avieni Fabulae Aesopicae. (1-42)
- ⑧ Anonymi Fabulae Aesopiae. (1-60)
- ⑨ Laurentii Abstemii Fabulae. (1-199)

AESOPI VITA は『イソップ伝』、①～⑨がイソップ集に該当する。本稿はとくにイソップ集部分に注目するが、①～⑤はギリシア語、⑥～⑨はラテン語による別種の集成で、ギリシア語部分はラテン語対訳となっている。②はネヴェレが自身で写本から採録した初出のギリシア語散文イソップ集、⑤はネヴェレが韻律をもとに抽出した、やはり初出のギリシア語韻文版である。巻末にはネヴェレによる注釈も掲載されており、当時の文献学的イソップ研究の成果ともいえる。また、①～⑧が古代から中世に流布していた話を中心とするのに対し、⑨は1500年前後のア

ブステミウスによるラテン語小話集であり、新しいものである⁵⁾。⑨は、のちのギリシア語・ラテン語原典を扱うイソップ集ではおよそ含まれない対象であり、ネヴェレ本を独特なものとする一因ともいえる。

異なるイソップ集に、(まったく同一ではなくとも)同種の話が含まれることは珍しくはない。一方、基本的に、一つのイソップ集のなかで、同じタイトルの話が含まれることはあるにせよ、内容まで同一の話が含まれることはない。上記のとおり、ネヴェレ本が複数のイソップ集をまとめたものであることを考慮すると、すべての話に異なる挿絵を作成することはコスト的にもあまり現実的とはいえないため、①～⑨をまたいだ挿絵の重複使用が起こりうることは想定できる。しかし、実際の挿絵重複パターンを検証すると、とくに①②において、同一イソップ集内で重複する挿絵が複数存在することを確認できる(なお、③～⑧それぞれの内部で挿絵の重複はなく、①②以外では、⑨で1例重複するのみである)。この場合、異なる話に共通の挿絵が使用され、本文テキストと対応しない挿絵が読者に提示されていることになる。

以上の挿絵をめぐる状況をふまえて、本稿は、ネヴェレ本を中心としていくつかの事例を検討し、近世印刷本イソップ集における挿絵と本文テキストの関係、挿絵の在り方について考察を試みる。ただし、本稿で全数を扱うことは困難であるため、具体的には、まずネヴェレ本内部で重複する挿絵に注目し、その後、ネヴェレ本以前のイソップ集も取り上げて、ネヴェレ本に至る挿絵の在り方を確認し、挿絵とテキストの関係を議論する。このような挿絵とテキストをめぐる問題はこれまであまり詳細に扱われていないように思われ、筆者自身、調査を進めるなかで、近世印刷本イソップ集の挿絵をめぐる錯綜した状況を実感した。本稿でその一端を示すことができれば、と期するところである⁶⁾。

2. ネヴェレ本で重複する挿絵の検討

ここでは、ネヴェレ本内部から、重複する挿絵を確認する。ネヴェレ本ではおよそ60種の挿絵に重複がみられ、重複のパターンは様々であるが、とくに話数と挿絵数の多い①②(ギリシア語散文イソップ集の系統)を中心に、5つの事例を取り上げる。

1) ①でのみ重複利用されるもの

①でのみ重複利用される例は、図1の1例のみである。

この挿絵が付される話は、

① 14 Κομπαστής (うぬぼれ屋)

① 127 Αλώπηξ και Δρυοτόμος (狐と木こり)

と題される2編。挿絵では、左側に犬を連れた人物が二人(猟師?)、中央に槍と盾を手にし剣を腰に吊るした人物、右側に後ろを振り返りつつ走る狐が描かれる。

① 14「うぬぼれ屋」は、各地の旅から故郷に戻ったという人物が旅先での自身の功績を自慢する話。現地に証人もいと語るが、話を聞いていた人物に、御託はいいので実際にやってみてくれと言われてしまう。

① 127「狐と木こり」は、猟師に追いかけられた狐が木こりのもとに逃げ込み、木こりが狐を匿った際の話。猟師が木こりのもとにやって来て狐を見なかったかと尋ねると、木こりは見なかったと答えつつ、手では狐の場所を指し示す。その後、結局捕まらなかった狐が、木こりの言行不一致を批判する。

挿絵と本文との対応では、「狐と木こり」に近いといえば近いが、挿絵では話の中心人物である木こりが描かれていない。一方、「うぬぼれ屋」は、対話する人物が登場するという点以外、挿絵とまったく対応しない。



図1 ネヴェレ本① 14 ① 127 挿絵

2) ②でのみ重複利用されるもの

②のみで重複利用される例は、図2の1例のみである。

この挿絵が付される話は、

② 153 Αἰγοβόσκος καὶ Αἴγες (山羊飼いと山羊たち)

② 154 Αἰγοβόσκος καὶ Αἴξ (山羊飼いと山羊)

と題される2編。挿絵では、左側に山羊の群れ、右側に一頭の山羊(らしき動物)とそれにまたがって押さえつける男が描かれる。また、男が山羊の首元にナイフをつきつけて山羊の首元から何かが垂れている。

② 153「山羊飼いと山羊たち」と② 154「山羊飼いと山羊」は、タイトルの点では山羊が複数か単数かの相違のみである。しかし、話の内容は大きく異なる。② 153「山羊飼いと山羊たち」は、嵐を避けて山羊たちと洞窟へ入った山羊飼いが、洞窟のなかで野生の山羊を見つける話である。野生の山羊たちが立派であったため、山羊飼いは自分の山羊を放置して、野生の山羊に餌を与えた。天候が回復したとき、山羊飼いの山羊たちは餓死し、野生の山羊たちはどこかに行ってしまうことになる。一方、② 154「山羊飼いと山羊」は、山羊飼いが山羊たちを小屋に呼び集めたとき、指示に従わない一頭の山羊に石を投げたところ、その山羊に石があたって角を砕いてしまう話である。山羊飼いは主人への露見を避けようと試みるが、事態は見た目から明白であり、ごまかしようがない。



図2 ネヴェレ本② 153 ② 154 挿絵

挿絵と本文の対応を考えると、山羊飼い（らしき人物）と山羊たちが描かれる点では、いずれの話とも関係するようにはみえる。しかし、挿絵に描かれる場面そのものは、それぞれの話のなかには登場しない。したがって、この例でもまた、厳密には本文に対応しない挿絵が附されていることになる。

3) ①②で重複利用されるもの

①②に限定して双方に重複する挿絵は6例ある。そのなかで、図3は、①1回②3回の計4回利用される挿絵である。

この挿絵が附される話は、

- ① 27 Ἐχθροί（敵同士）
- ② 250 Ναυάγος（難破した者）
- ② 251 Ναυάγος καὶ θάλασσα（難破した者と海）
- ② 271 Πλέοντες（船に乗る者たち）

と題される4編。挿絵では、荒波のなかに船が浮かび、船から逆さまに落とされる人物とマスト中程にしがみつくと人物が特徴的である。また、海には何らかの海獣（イルカ？）がおり、左奥には竖琴を手にして海獣に乗る人物が描かれる。

これら4編の話は、いずれも船が関わっている点では共通する。しかし、それぞれの話に、挿絵に対応する場面は登場しない。①27「敵同士」は、仲の悪い者たちが同じ船に乗ることになり、舳先と艫側に分乗



図3 ネヴェレ本①27 他挿絵

した際の話である。海が荒れて船が沈みそうになるが、いわゆる呉越同舟とは異なり、両者が協力することはない。② 250「難破した者」は、金持ちのアテナイ人が他の者たちと乗り合わせて航海していたときの話。嵐が起きて船が転覆するが、他の者たちが泳いで助かろうとする一方、アテナイ人は多量の供物を約束してアテネ女神に助命を願うばかり。近くを泳ぐ者に、手を動かせ、と言われることになる。② 251「難破した者と海」は、船が難破して海岸に打ち上げられた人物が、穏やかな海をみて恨み言をいう話である。② 271「船に乗る者たち」は、船旅をする者たちが、激しい嵐で船が沈みそうになったとき、故郷の神々に必死に嘆願するが、嵐が収まり無事が確保されると、今度はお祭り騒ぎで喜ぶ話。一喜一憂する者たちを操舵手がいさめる。

ちなみに、「船に乗る者たち」と同種の話がファエドルス集に含まれ、ネヴェレ本では⑥ 75に De fortunis hominum (人間の運命について)として掲載されている。しかし、この話には図3のものを含めて、挿絵が付されていない。もちろん、図3は本文に対応しない挿絵であるため、付されていないこと自体はむしろ正しいが、①②の有り様に較べて一貫性を欠く措置であるようにもみえる。なお、この挿絵の図面で、船から落とされる人物、豎琴を手にしてイルカに乗る人物の姿は、伝説の歌い手アリオンの逸話を彷彿とさせるが、この点については後述する。

4) ①～⑨で重複利用されるもの

①から⑨までをまたいで重複利用される挿絵は多いが、すべての挿絵のなかでもっとも重複利用されている挿絵は、図4のものである。①②③④⑥⑦⑧で1回ずつ、計7回利用されている。

この挿絵が付される話は、

- ① 134 Τέττις καὶ Μύρμηκες (蟬と蟻たち)
- ② 248 Μύρμηξ καὶ Κάνθαρος (蟻とフンコログシ)
- ③ 1 Μῦθος ὁ τῶν τέττιγων καὶ τῶν μυρμήκων προτρεπόμενος τοὺς νέους εἰς πόνον (若者たちを労働へと促す、蟬たちと蟻たちの話)
- ④ 41 Περί μύρμηκος καὶ τέττιγος (蟻と蟬について)
- ⑥ 81 Formica et Musca (蟻と蠅)
- ⑦ 34 Formica et Cicada (蟻と蟬)
- ⑧ 36 De Musca et Formica (蠅と蟻について)

の7編である。挿絵では、左側に羽根をもった、一見バッタのようにみえるが正体不明の昆虫、右側にアリス昆虫が描かれる。いずれも足が8本あるため、正確な描写ではない（あるいは、右側のアリスはクモにもみえる）。

①②③④⑦にみられる話は、現在は「蟻とキリギリス」として著名な話であり、蟬やフンコロガシの相違はあるものの、内容は同種の話である。つまり、夏の間にはせつせと働く蟻と、夏に働かず、冬になって困って蟻のもとを訪ねる蟬／フンコロガシが描かれる。

挿絵はむしろ「蟻とキリギリス」に対応するようにもみえるが、本文でそれに類する昆虫は登場しないため、本文との対応の面では、この挿絵は不正確ではある。とはいえ、話のヴァリエーションという観点で考えると、これらの話に共通してこの挿絵が設定されていることについては、一定の理解はできる。

一方、⑥⑧にみられる話が悩ましい。⑥はファエドルス集に含まれる話、⑧は中世に流布したラテン語韻文版の話である。中世に流布したラテン語散文イソップ集には、ファエドルス集に由来する話が多く含まれる、ロムルス集と呼ばれる集成がある。さらに、ロムルス集が韻文化された集成も伝わっており、ネヴェレ本はそれを *Anonymi Fabulae Aesopiae* として60編採録した。ここでも、⑥81「蟻と蠅」と⑧36「蠅と蟻について」の内容を確認すると、両者に関連を認めることができるため、これら2編に共通の挿絵が付されることは不自然ではない。



図4 ネヴェレ本①134 他挿絵

⑥ 81「蟻と蠅」の話は、蠅と蟻が言い争う話で、蠅の自慢話に蟻が痛烈に言い返す。興味深いのは、蟻の返答に含まれる、次の一節である(本文テキストはネヴェレ本より)⁷⁾。

Nihil laboras; ideo cum opus est nil habes: 16

Ego granum in hiemem cum studiose congero,

Te circa murum video pasci stercore:

Aestate me laccessis; cum bruma est, siles:

Mori contractam cum te cogunt frigora, 20

Me copiosa recipit incolumem domus.

あなたは何ら働かない。それゆえ、必要なとき、何も手元にない。

私が冬へ向けて穀物を熱心に集めていると、

あなたが壁のまわりで糞を食べているのを目にする。

あなたは、夏には私を挑発するが、冬になると黙り込む。

あなたが寒さで死にそうになるとき、

私は何事もなく、食料のたくさんある巣にいるのだ。

この箇所は「蟻と蟬／フンコロガシ」の話をつまえた発言のようにみえる。①②③④⑦に含まれる同種の話に付された挿絵が、同種とはいえない⑥⑧に含まれる話にも付されている理由として、この蟻の返答の内容を読み込んだうえでの判断であった可能性もあるように思われる。挿絵において、蟬／フンコロガシという昆虫の相違が図案的には無視されていることを考慮すると、蟻と蠅の対話で蠅が描写されていないことに問題はなく、蟻の返答をつまえて、この挿絵が意図する内容の枠組みに収められる。この場合、本文テキストに合わせた挿絵の選択ということになるが、いずれにせよ挿絵の図案と本文のずれが解消しないことに変わりはない。

5) ⑥⑧で重複利用されるもの

⑥⑧でのみ重複する挿絵は8例ある。ここまで取り上げた事例は、挿絵と本文が完全には対応しないものであったが、両者が対応するものも存在することを示しておこう。その一例として、図5は、⑥⑧で1回ずつ、計2回使用される挿絵である。



図5 ネヴェレ本⑥26⑧33挿絵

この挿絵が付される話は、

⑥26 *Vulpis et Ciconia* (狐とコウノトリ)

⑧33 *De Vulpe et Ciconia* (狐とコウノトリについて)

の2編。狐とコウノトリがお互いに食事に招きあう話である。狐がコウノトリを食事に招待し、お皿にスープを注いで出す。しかし、コウノトリはスープを飲めない。その後、今度はコウノトリが狐を食事に招待する。コウノトリは口の細い壺に食べ物を詰めて狐に出す。すると、狐は食事を食べられない。結果として、狐は自身が行った振る舞いと同種の仕返しを受けることになる。挿絵は、一画面のなかで、異なる時間軸の狐とコウノトリのやりとりを巧みに配置して描いており、まさに本文の内容を表現するものといえる。

さて、ここまで5枚の挿絵をもとに、ネヴェレ本において重複する挿絵の、本文との関係性を検討してきた。最後の事例のように、本文の内容を見事に表現する挿絵も存在し、あるいは一定の配慮が見受けられるような挿絵もあるように思われるが、どちらかという挿絵と本文の完全な一致に強いこだわりはないようにみえる。このような状態において、はたして挿絵が読者に与えた影響がどのようなものであったか、という点も興味深いところであるが、本稿ではむしろ、挿絵の描かれ方に注目したい。つまり、個々の挿絵が何に基づいて描かれたか、という問題である。

挿絵画家が何か一つの話をもとに作画し、それが挿絵として利用されたとすれば、挿絵の重複利用があるとしても、もとにしたであろういずれか一つの話とは合致する可能性が高い。しかし、ネヴェレ本をみると、実際には、重複使用される挿絵で、個々の話と一致せず、緩い関連性しか見いだせないものが複数存在するのである。一方、この問題の背景を考えるため、ネヴェレ本の挿絵の在り方を調査したところ、挿絵自体がネヴェレ本のために作られたものではないことが分かってきた。すなわち、個々の挿絵がネヴェレ本に含まれる話を直接参照して制作されたのではなく、印刷業者が手持ちの木版画を流用して印刷した、ということである。そこで、次章では、ネヴェレ本の挿絵の由来について議論を進めたい。

3. ネヴェレ本の挿絵の由来について

ネヴェレ本掲載の挿絵をみると、その多くにVSの文字を意匠化したモノグラムが含まれている。たとえば、前章で引用したものでは、図2以外の挿絵にはこのモノグラムがみられる。これはニュルンベルクで活動した画家ウィルギリウス・ソリス Virgilius Solis (1514-1562) および彼の工房が用いたモノグラムである。ソリスは多くの印刷本の挿絵を作成しており、聖書やオウィディウス『変身物語』の挿絵でも知られる⁸⁾。

1566年、ソリスの挿絵が印刷されたイソップ集が、ネヴェレ本と同じくフランクフルトで刊行されている。同書は *Aesopi Phrygis Fabulae, elegantissimis eiconibus veras animalium species ad vivum adumbrantes* と題され、極めて優雅な図像で動物たちの実像が描かれることが主張される。そして、その Praefatio のなかに ille Noribergensis Pictor Virgilius Solis という記述を確認でき、「あのニュルンベルクの画家ソリス」が挿絵を担当したことが明記されている。こうした書きようから、ソリスの挿絵の存在は、同書のセールスポイントの一つであったと考えられる。また、同書は Hartmann Schopper (1542-1595) によるラテン語版散文の話をもつ192話含み、そのすべてに挿絵が付されている。ただし、ここでも挿絵の重複利用が行われており、筆者が数えたところ、挿絵自体は156種（そのうち103種にVSモノグラム）存在する。なお、1566年刊行とすると、ソリス没後の刊行ということになるが、ソリスの生前から

挿絵が準備されていたのか、ソリス没後の工房作であるのか、あるいは両者が混在しているのか、詳細は不明である。本稿では、モノグラムの有無にかかわらず、ソリスに関わる挿絵が含まれる刊本の挿絵はすべて、ソリスの挿絵と呼んでいる。

また、筆者が調べた限りでは、1574年フランクフルト刊行の2種のイソップ集に、ソリスの挿絵が用いられたものを確認できる。一つは、1566年版と同タイトルの再刊本であるが、Praefatioは掲載されない。挿絵にも数話分に相違があり、1566年版では話に対応する正しい挿絵であったものが配置を誤って別の挿絵になったと思われるもの（誤字ならぬ誤挿絵）や、1566年版には含まれない挿絵（VSモノグラムあり）で置き換えられているものなどがみられる。ソリスの挿絵が用いられたもう一つのもは、*Phryx Aesopus Habitu Poetico Hieronymi Osii Tyrigetae*と題される、ドイツの詩人・学者であったオシウス Hieronymus Osius (?-1575)によるラテン語韻文イソップ集である。オシウスによるラテン語韻文イソップ集は *Phrygis Aesopi Fabulae, Carmine Elegiaco* として1564年にヴィッテンベルクでも刊行されているが、1574年本ではラテン語本文が改訂された⁹⁾。1574年のオシウス本では、1566年本や1574年再刊本にみられない挿絵が20種以上含まれる。

1566年本の挿絵をネヴェレ本103種と比較すると、91種がネヴェレ本と共通である（62種にVSモノグラム）。さらに、二つの1574年本から計9種がネヴェレ本と共通する（6種がVSモノグラムあり）。したがって、（あくまで筆者が確認できた範囲では、）ネヴェレ本の挿絵のなかで初出のものは3種ということになるが、そのうち2種にはVSモノグラムがみられ、ソリス系の挿絵であることを確認できる。これだけの一致がみられることをふまえると、ネヴェレ本のすべての挿絵について、それらが同書のために新規に作成されたものではなく、既存のものを再利用したものであったとみても不合理ではないだろう。この場合、ネヴェレ本の各話に付された挿絵は、既存のどの挿絵を選択するかという（編集・印刷に携わっただれかの）判断の結果であったということになる。

なお、刊本毎の挿絵を比較すると、たとえば図6、図7、図8のように、特徴が一致する例も複数みられる。こうした例をみる限り、印刷されている挿絵については、おそらく、同じ版木が受け継がれ再利用され



図6
1566年本第187話 Bos et Iuvenicus
「老いた牛と若い牛」挿絵。とくに
枠線に注目すると、図7・図8
と特徴が一致している。なお、挿
絵は話の内容に対応したものである。



図7
1574年再刊本第187話挿絵。図6
のものと同文は同じ。オシウス本
でも同題の同種の話にこの挿絵が
附される。



図8
ネヴェレ本①23挿絵。ネヴェレ
本では「主人と犬」と題される話
に附されており、牛を殺す人物が
登場する点以外、挿絵と本文は対
応しない。

たものと推察できる¹⁰⁾。

ところで、1574年再刊本の挿絵には、上述のとおり、1566年本に含まれない挿絵で置き換えられている事例がみられる。図9、図10の挿絵である。

これらの挿絵が付される話は、97「FVRES」（泥棒たち）と題される一編。ある家に忍び込んだ泥棒たちが、鶏以外に発見できず、その鶏をつかまえて殺そうとする話である。鶏は、自身が人を目覚めさせ人間に役立つ存在であることを主張するが、泥棒たちは、だからこそ殺すのだと答える。1574年再刊本の挿絵の変更は、VSモノグラムを含む挿絵への変更という点で意図的なものにもみえるが、実際のところ、1566年



図9 1566年本第97話挿絵

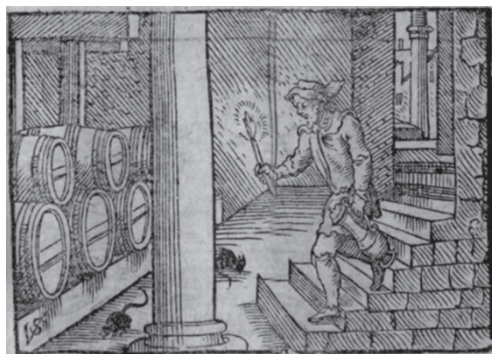


図10 1574年再刊本第97話挿絵

本でも 1574 年再刊本でも話に対応しない挿絵が付されていることになる。

ネヴェレ本では、再刊本の挿絵（図 10）が③ 26 話および⑧ 12 話で重複利用されている。これらは、

③ 26 Μῦθος ὁ τῶν μυῶν, παραινῶν στέργειν τὰ μέτρια（ほどほどに満足することを勧める、鼠たちの話）

⑧ 12 De mure Urbano & Rustico（町の鼠と田舎の鼠について）

と題される、同じ話のヴァリエーション違いの二編である。いずれも、町の鼠が田舎の鼠を住まい（人家）に招待して食事をしているとき、だれかがきて逃げ惑うという話で、挿絵とおよそ合致する内容となっている。したがって、ネヴェレ本は、この話についてはいわば正しい挿絵の選択をしているといえる。

一方、図 8 におけるネヴェレ本の事例は、少々特殊である。というのも、1566 年本の 23 話「Herus et Canis」（主人と犬）には図 11 の VS モノグラム付挿絵が付されており、これは話の内容と合致するためである。

ネヴェレ本① 23 「主人と犬」も同種の話であり、本来ならばこの挿絵が再利用されるのが自然な流れだろう。ここであえて図 8 の挿絵を用いる積極的な理由は見当たらないが、もしかしたら、図案の構成（人物がハンマー／斧を振り上げて牛を狙う）が似ているために使用する挿絵を誤った、あるいは、版木自体がなかった、などといった事情があったのかもしれない（同様の事例には、前章で取り上げたネヴェレ本「蟻と



図 11 1566 年本第 23 話挿絵

蠅」の話も該当するが、「蟻と蠅」の場合は、図4の挿絵を選択する意図を推測可能ではあった。「蟻と蠅」に合致するソリスの挿絵の版木が失われていたとすれば、ネヴェレ本の選択はより有意義なものとなる。

こうした事例を考慮すると、ネヴェレ本では、既存の挿絵のストックをもとに、個々の話の内容をふまえて選択的に挿絵を附していたようにみえる。ただ、前章でみた例のとおり、その場合の挿絵と本文の対応については、その閾値となる基準が非常に緩かった。描かれる要素に一部でも本文と共通する部分があればよく、全体的に一致することは必ずしも求められない。とはいえ、この点については、話に対応した挿絵を新規に制作するのではなく既存の挿絵を再利用していたこと、そして、おそらくは挿絵を多数付して価値を高めようとした当時の出版事情などから、個々の選択におのずと限界があり、そのようにせざるをえなかった面もあったようにも思われる。

ただし、挿絵の重複や、話の内容との対応の問題は、1566年本の時点ですでに生じていた。ソリスの挿絵を売りにした同書がそのような状態であった原因としては、個々の話すべてに対応する挿絵が制作されていたわけではなく、利用可能な挿絵の数に限りがあった（が利用する挿絵数は増やそうとした）こと、そもそも制作された挿絵が本文と必ずしも対応しない場合があったこと、などを想定できる。こうした状況を考える手がかりの一つとして、次章で検討するような、挿絵に関するある種の伝統と呼ぶうるものがあつたのではないかと考えられる。

4. 挿絵の参照元をたどる

ソリスが制作したオウィディウス『変身物語』の挿絵では、同時代に挿絵画家として著名であったサロモン Bernard Salomon (1506?-1561)を中心に、先行する画家が制作した既存の図案を模倣し、手を加えられたものが多い¹¹⁾。その点はイソップ集のソリス系挿絵においても同様である。

サロモンに帰される挿絵が付された最初のイソップ集は、印刷業者トゥルヌ Jean de Tournes (1504-1564)によって、1547年にリヨンで刊行された。*Les Fables d'Esoppe Phrygien, mises en Ryne Francoise* と題された同書は、フランス語による100話を含み、すべての話に挿絵が付さ

れている（1種のみ重複があり、99種の挿絵が示される）¹²⁾。その後もリヨンではトゥルヌによって何度もイソップ集が刊行（あるいは再刊）されており、たとえば1551年には *Aesopi Phrygis Fabulae Elegantissimae Iconibus veris animalium species ad vivum adumbrantes* の題で、新規の挿絵も追加したギリシア語・ラテン語対訳イソップ集が刊行されている¹³⁾。筆者が1547年本と1551年本に含まれる挿絵とソリスの挿絵を比較してみたところ、ソリスの挿絵のうち100種近くの図案が類似していることを確認できた。なお、1551年本の書名をみるに、フランクフルト刊行の1566年本は、明らかにそれを意識したものである。

1547年本の巻頭には、コロゼ Gilles Corrozet (1510-1568) による序文が付されている。コロゼは書籍商であり、文筆家・詩人としても知られた人物で、1540年にはパリで *Hecatomgraphie* と題するエムブレムブックを刊行している。コロゼが同様の形式にイソップ集を落とし込んだのが、1542年にパリで刊行された *Les Fables du très ancien Esope Phrygien premièrement escriptes en Graec, & depuis mises en Rithme François* であった¹⁴⁾。同書は100話を含み、すべての話に挿絵が付されている（ただし数種の挿絵が重複）。1547年本は、コロゼ本と本文ほか話順等も共通しており、実態としては、コロゼ本をベースに、挿絵をサロモンの挿絵へと差し替えて構成されたものであった。

1547年本のサロモンによる挿絵は、コロゼ本挿絵に準じたものが多く、あるいはコロゼ本挿絵の誤りを是正している場合もある。一方、サロモンの挿絵で図案が大きく変更され、むしろ本文から乖離してしまう事例もみられる。ここではまず、図案が変更されたものから、特徴的な二つの事例を検討する。コロゼ本 = 1547年本第4話「Du Chien & de la piece de chair」（犬と肉片）およびコロゼ本 = 1547年本第84話「Des deux ennemys」（二人の敵たち）の2編である。

はじめに、「犬と肉片」の話について検討する。コロゼ本および1547年本では図12、図13の挿絵が付されている。両者に印刷されている本文は共通であるが、図案に関わるのは以下の冒頭部分である（テキストはコロゼ本より）¹⁵⁾。

Vng Chien portoit vne piece de chair
Dedens sa gueule, & se print à marcher
Sur vne planche en passant la riuere,
Et le Soleil par sa claire lumiere,
Faisoit de luy & de la chair aussi
Vng ombre en l'eau. Or aduint il ainsy
Qu'il passoit l'eau, icelle ombre aduisa
Laquelle alors plus que la chair prisra,
.....

コロゼ本挿絵（図12）では、犬は板の上を歩いて川を渡っている。さらに水面に映る肉の影は、実際にくわえているものより大きくみえる。



図12 コロゼ本第4話挿絵

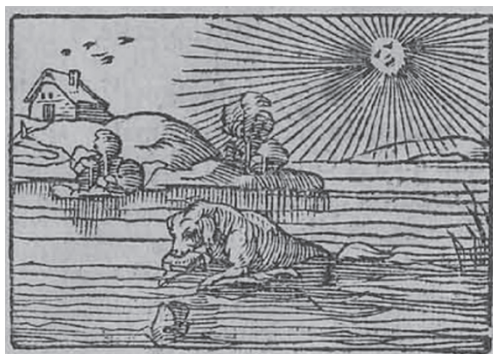


図13 1547年本第4話挿絵

これはおよそ本文に対応する描写である。一方、サロモンの挿絵（図13）は、空中で太陽が輝いている点は本文に対応するが、犬が川を泳いでおり、水面に肉片が大きく映っていない。

「犬と肉片」の話は、古代からイソップ集のいわば定番の話であり、現代に至るまで様々なヴァリエーションが存在するが、犬が川を泳ぎ、水面に映った肉片が大きくみえるわけではない点は、大きくはファエドルス集の系譜に属する。一方、ギリシア語系統の話では、犬が川（のそば）を歩き、水面に映った肉片が大きくみえる¹⁶⁾。サロモンの挿絵では犬が泳ぎ空中で太陽が輝くが、16世紀を通じて版を重ねたイソップ集に、この図案に合致する話が含まれている。同書は、1515年にストラスブルで刊行された、ドルピウス Martinus Dorpius の編集によるラテン語散文イソップ集で、当該の話は「De Cane & Umbra」（犬と影）の題で含まれる¹⁷⁾。話自体はファエドルスの系譜に属するラテン語系の一種であるが、サロモンの挿絵は、この話冒頭の情景描写に合致するのである。以下、冒頭部分を引用する。

Canis tranans fluuium, rictu uehebat carnem. Splendente sole, ita ut fit, umbra carnis lucebat in aquis, ...

犬が泳いで川を渡りながら、肉片を口で運んでいた。太陽が輝いており、そうなるべくして、肉の影が水面で煌めいていた。

サロモンの挿絵はまさにこの箇所を画像化したものと評価できる。こうしてみると、サロモンはむしろドルピウス本の話（あるいはその系統のフランス語版等）をもとに挿絵を制作し、それが1547年本で利用された可能性もあるだろう。ソリスは、サロモンの挿絵をもとに図案を作り、それが図14の挿絵としてネヴェレ本で利用された。

ネヴェレ本では、この挿絵が② 213 ③ 35 ④ 32 ⑥ 4 ⑧ 5 の5話で使用されている。すべて同種の話であるが、⑥⑧に含まれる話はファエドルスに関わるものであるので、本文に太陽の描写はないが、挿絵と本文はおおよそ合致する。②③④に含まれる話はギリシア語版であり、肉をくわえた犬が川の中や側を歩くため、挿絵の描写とは対応しない。とはいえ、ネヴェレ本でディティールの異なる同種の話に同じ挿絵が付されることはしばしばあるのであり、この話もその事例の一つといえることができる。



図 14 ネヴェレ本② 213 ③ 35 ④ 32 ⑥ 4 ⑧ 5 挿絵

興味深いのは、② 213 である。以下、冒頭部分を引用する。

Κύων κρέας ἔχουσα ποταμὸν διέβαινε. . .

Canicula carnem habens flumina transnatabat . . .

ネヴェレ本のギリシア語部分にはラテン語訳が付される。引用箇所
のラテン語は、ほぼ直訳的ではあるものの、διέβαινε「(歩いて) 渡って
いた」を transnatabat「泳いで渡っていた」としている点が特徴的である。
ラテン語訳で泳ぐことにした理由は詳らかではないが、その結果、ラテ
ン語訳のほうは、挿絵と対応することになるのである。

つづいて、「二人の敵たち」について検討しよう。コロゼ本および
1547 年本では図 15、図 16 の挿絵が付されている。

「二人の敵たち」は、本稿第 2 章でとりあげたネヴェレ本① 27 と
(ディティールの相違はあるが) 同種の話である。話のなかで実際に船
が沈むことはないものの、船の前後の片側が先に沈むことが語られる。
コロゼ本挿絵 (図 15) は、沈没の情景を表すものであるが、片側が沈
んでおり、話に対応した図案といえる。一方、1547 年本の挿絵 (図 16)
である。ネヴェレ本挿絵 (図 3) と見比べると、ソリスがこの図案を参
照したことは明らかであるが、ネヴェレ本同様、船という点以外に話に
対応しない挿絵となっている。

実のところ、この挿絵は他の本から流用されたものであった¹⁸⁾。1547
年にリヨンで刊行されたアルチャーティ Andrea Alciat (1492-1550) 『エ



図15 コロゼ本第84話挿絵



図16 1547年本第84話挿絵

ンブレマタ』フランス語訳版 *Les Emblèmes* の第11番に、同じ挿絵が掲載されている。そのエンブレム第11番は *De ceux qui ont bon heur par estrangers* と題され、アリオンの逸話が示される。すなわち、豎琴を手に海に落とされたアリオンがイルカに助けられるのである。挿絵の図案はそれに合致するものであり、サロモンの挿絵がアリオンの逸話に合わせて制作されたことを確認できる。本稿第2章で、ネヴェレ本の挿絵(図3)がアリオンを彷彿とさせると述べたが、実際に、その挿絵の参照元の図案がアリオンをふまえていたわけである。このことは、ソリスが挿絵を描く際に、原図の参照テキストまではあまり意識していなかった可能性をほのめかす。すなわち、挿絵制作のプロセスにおける挿絵画家の在り方が垣間見えるのである。

ところで、コロゼ本「犬と肉片」の話において、犬は板の上を歩いて川を渡るが、同種の話のなかでこれは稀少な展開である。この展開を含み、16世紀半ばまでにフランスで参照しやすかったものは、本稿冒頭でも触れた、1482年にリヨンで刊行され、その後もたびたび再刊されたマシヨー Julien Macho によるフランス語訳本に含まれる話、ということになろう¹⁹⁾。マシヨー本では「du chien et de la piece de chair」として、以下のとおり、板の上を歩く犬が登場する（下線は筆者）²⁰⁾。

... Au temps jadis ung chien passoit sur une planche lequel en sa bouche une piece de chair tenoit, et comme il passoit sur celle planche aperceut l'ombre de luy et de sa piece de chair dedens l'eaue et cuyda estre une aultre piece de chair. ...

ここではとくに川の上と明示されるわけではないが、この後の場面で犬が川の中に肉片を落とす姿が描かれている。一方、太陽は輝かず、肉片の大きさにもとくに言及されていない。こうしてみると、コロゼ本の「犬と肉片」は、犬が板の上を歩く点はマシヨー本の要素をふまえ、輝く太陽はドルピウス本の要素を、肉片の大きさはアプトニオスなどの当時参照可能であったギリシア語系統の話の要素を取り込んで構成されたものであったと推測できる。

マシヨー本巻末の記載によると、同書はラテン語からフランス語へ翻訳されたイソップ集である²¹⁾。その原本はシュタインヘーヴェルによるラテン語／ドイツ語訳イソップ集であった。シュタインヘーヴェル本は1476年にウルムで刊行されたものをはじめ、たびたび印刷されており、なかには、ドイツ語部分のみで構成された版も見受けられる。シュタインヘーヴェル本の「犬と肉片」の話では、犬の様子が以下のように記述される。

... Canis flumen transiens partem carnis ore tenebat, ...

... Ain hund truog ain stük flaisch in dem mul, und lieff durch ain fließend waßer. ...

ラテン語では「川を渡っている犬が肉片を口にくわえて」おり、ドイ

ツ語訳では「犬が口に肉片をくわえ、流れる水のなかを歩いた」。ラテン語部分はファエドルス集に由来するラテン語散文であるが、ファエドルス集では川を泳いで肉を運んでいた犬が、*flumen transiens* では川の渡り方までは明確ではなく、川を泳いでいるかどうか曖昧になる。一方、ドイツ語訳では、犬は川（流れる水）を通して歩くのである。マシヨー本の「犬と肉片」における板の要素が、マシヨーによる追加であることが分かる。

シュタインハーヴェル本もマシヨー本も多くの話に挿絵が付されており、マシヨー本の挿絵は基本的にシュタインハーヴェル本の挿絵を模倣したものとなっている。「犬と肉片」の話には、それぞれ図 17、図 18 の挿絵が付されている。



図 17 シュタインハーヴェル本「犬と肉片」挿絵



図 18 マシヨー本「犬と肉片」挿絵

二つの挿絵を比較すると、マシヨー本の挿絵がシュタインヘーヴェル本の挿絵をかなり正確に模倣したものであることは明白である。そして、それゆえに、マシヨー本の挿絵では、「犬と肉片」におけるマシヨーの追加要素に対応できていない。全体的に確認してみると、マシヨー本の挿絵がシュタインヘーヴェル本の挿絵の模倣であることは「犬と肉片」に限ったものではないことが分かる。「犬と肉片」の事例は、マシヨー本において、挿絵画家に対する挿絵制作の依頼がシュタインヘーヴェル本の模倣であり、印刷業者がシュタインヘーヴェル本と同様に挿絵を配置したのであって、その際にマシヨーの本文との合致はとくに重視されていなかったことを示す²²⁾。

シュタインヘーヴェル本の「犬と肉片」の挿絵は、ラテン語にもドイツ語訳にも対応するようにみえるが、テキストの表現との一致という点では、ドイツ語訳の方により合致する。この点については、シュタインヘーヴェル本他の話の事例からも確認できる。すなわち、ラテン語本文とドイツ語訳で登場する生物に変更があった場合に、挿絵の図案がドイツ語訳に対応している事例である。以下、二つの事例をとりあげる。

一つはラテン語で「de ranis et Jove」(蛙たちとユピテル)と題される話。蛙たちが支配者 (rector) を求めてゼウスに嘆願する。はじめ木片を与えられた蛙たちはそれに満足せず、再びユピテルに嘆願する。すると、今度は水蛇 (hydrus) を与えられ、蛙たちは水蛇に食べられてしまう²³⁾。ドイツ語訳では「fabel von den fröschen」と題され、蛙がさいごに与えられるのは水蛇ではなく、コウノトリ (stork) とされる。そして、シュタインヘーヴェル本では図 19 の挿絵が付されている。

挿絵の図案は明らかにドイツ語訳に対応したものである。そして、マシヨー本においても、ほぼ同じ図案の挿絵が付されている。なお、マシヨー本の「蛙たちとユピテル」の話では、ユピテルがさいごに与えるのはアオサギ (hayron) とされており、図案としてはおよそ本文と対応するものとなる。また、コロゼ本では、ユピテルがさいごに与えるのはコウノトリ (cigoigne) とされ、図 20 の挿絵が付される。

コロゼ本挿絵 (図 20) は、コウノトリとするには鳥の描写に少し難があるようにも思われるが、基本的には話に対応する挿絵となっている。そして、この系統の図案が、サロモン、ソリスと受け継がれるのである (図 21、図 22)。



図 19 シュタインハーヴェル本「蛙たちとゼウス」挿絵



図 20 コロゼ本第 17 話「蛙たちと王様」挿絵

1547 年本（図 21）では、サロモンによって洗練された挿絵となる。本文はコロゼ本と共通であり、挿絵はまさに話の内容を表現する。一方、1566 年本（図 22）では、サロモンの挿絵を下敷きに制作したと思しきソリスの挿絵が付されるわけであるが、本文テキストでは、ユピテルはさいごに水蛇（hydrus）を与えることになる。

この「蛙たち」の話は、ファエドルス集やギリシア語散文イソップ集にも同種の話が含まれる、古代から知られた話である。いずれの場合も、ユピテル（ゼウス）がさいごに蛙たちに与えるのは水蛇（hydrus/ ὕδρος）であり、コウノトリ等の鳥は登場しない。ネヴェレ本ではソリスの挿絵が② 170 ⑥ 2 ⑧ 21 で 3 回使用されるが、これらはギリシア語散文およびファエドルス関係の話であるため、本文テキストと挿絵は対



図 21 1547 年本第 17 話「蛙たちと王様」挿絵



図 22 1566 年本第 162 話「蛙たちとユピテル」挿絵

応しないものとなる。ただし、同種の話という大きな枠組みでは必ずしも誤った挿絵ではなく、図案についてはむしろシュタインハーヴェル本のドイツ語訳テキストに由来するものといえるのである。

同様の事例として、本稿第 2 章で検討した「蟻と蟬」の話も挙げられる。古代から定番の話であり、ネヴェレ本では同一の挿絵（図 4）が 7 回使用されていた。とはいえ、挿絵に描かれるのは蟻とバッタと思しき生物であり、いずれも本文と一致していなかった。しかし、この点についても、シュタインハーヴェル本のドイツ語訳テキストにその要因を認

めることができる。

この話は、シュタインハーヴェル本ではラテン語で「de Formica et Cicada」（蟻と蟬）として含まれる。冬に蟻に食料をねだる蟬の話である。ドイツ語訳では「fabel von der amais und dem grillen」と題され、蟻とコオロギの話として展開する²⁴⁾。シュタインハーヴェル本では、図23の挿絵が付されている。

前段「蛙」の話と同じく、この挿絵（図23）もドイツ語訳に対応したものである。コオロギの描写は、よく特徴を捉えたものにみえる。ところが、マシヨール本では、「蛙」の場合と異なり、登場する生物に変更はなく、「de la fromis et de la sigaille」²⁵⁾としてラテン語の蟻と蟬が維持される一方、シュタインハーヴェル本の図案をかなりの精度で模写した挿絵が付される。

コロゼ本でもまた、蟻（formis）と蟬（sigalle）の話としてテキストは示され、図24の挿絵が付される。

この挿絵（図24）は、まだ多少のコオロギらしさを保つものともいえるが、本文テキストとは対応しない。コロゼ本の場合、興味深いのは話のタイトルである。すなわち、「Des Formis & de la Sigalle ou Grillon」とされ、「蟻と蟬」に加えて、本文には登場しないにも関わらず、「あるいはコオロギ」と添えられるのである。こうしたタイトルは特異なものであり、コロゼ本のなかに他に例は見られず、他のイソップ集にも同様の例はないように思われる。はたしてコロゼがシュタイン



図23 シュタインハーヴェル本「蟻と蟬」挿絵



図 24 コロゼ本第 99 話挿絵「蟻と蟬」挿絵

ハーヴェル本のドイツ語訳版を把握していたか不明であるが、「犬と肉片」の話をつまめると、コロゼがマシヨー本を知っていたことは確かだろう。「蛙たち」の場合は、マシヨー本の本文テキストでは水蛇ではなくアオサギとされたため、異なる本文テキストを元にした挿絵の問題は目立たないが、「蟻と蟬」については、本文テキストと挿絵図案に表われる相違が顕著である。コロゼ本タイトルの「コオロギ」は、むしろこの本文テキストと挿絵のずれに起因して添えられた可能性も考えられる。その場合、挿絵の図案が、タイトル部分ではあるが、印刷されるテキストに影響した、ということになる。

1547 年本のサロモンの挿絵は、図 25 のとおり、コロゼ本の系統の図案が描かれる。

この挿絵では、コオロギあるいはバッタと思しき 4 本足の生物となり、正体不明となっている。1566 年本では、サロモンの図案をもとに、図 26 の挿絵となる。

サロモン挿絵で 4 本足であった生物が 6 本足に修正される。しかし、当初のコオロギからは大きく離れ、この絵からコオロギを思い浮かべることは難しい。あるいは挿絵画家にとっても、自身が何を描こうとしているか認識できていなかった可能性もある。また、この挿絵は、2 種の 1574 年本でも「蟬と蟻たち」の話に対する挿絵として再利用されている。ところが、ネヴェレ本では、別の挿絵（図 4）に変更されるのである。比較するとネヴェレ本の方は、図案内部の各要素の配置がシュタインハーヴェル本の挿絵に近く、むしろそちらを参照して制作されたように



図 25 1547 年本第 99 話「蟻と蟬」挿絵



図 26 1566 年本第 134 話「蟬と蟻たち」挿絵

もみえるが、生物の描写の変わりようが大きく、確実なことは分からない²⁶⁾。

その点では、第 2 章で扱った図 5 の挿絵の事例は、ソリスがシュタインヘーヴェル本（あるいはその挿絵を高い精度で模写したマシヨー本）の挿絵も参照していた可能性を明示してくれる。この挿絵が付される「狐とコウノトリ」の話は各種イソップ集に含まれ、コロゼ本から 1547 年本、1566 年本、1574 年再刊本に至るまで、類似の挿絵が付されている（図 27、図 28、図 29）。

ソリスの挿絵（図 29）は、VS モノグラムもあり、図案はサロモンの



図 27 コロゼ本第 27 話「狐とコウノトリ」挿絵

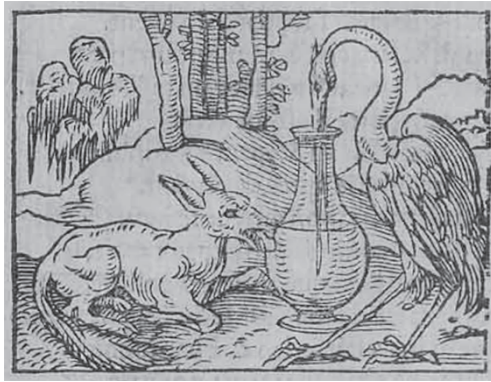


図 28 1547 年本第 27 話「狐とコウノトリ」挿絵



図 29 1566 年本第 165 話「狐とコウノトリ」挿絵

挿絵に倣ったものであることは明確である。ところが、1574年のオシウス本では、ネヴェレ本で使用される挿絵（図5）へと差し替えられている。シュタインハーヴェル本の「狐とコウノトリ」に付された挿絵（図30）と比較すれば、両者の関係は一目瞭然である。

狐がコウノトリを招待して悪意を示し、次にコウノトリが狐を招いて仕返しをする、という本文テキストの流れを考えると、サロモンや差し替え前のソリスの図案は、コウノトリの仕返しのみを描くものである（コロゼ本のもは、両者が無駄な振る舞いをしているようにみえる）。狐とコウノトリの相互的なやりとりを示す挿絵としては、シュタインハーヴェル本の図案が全体をよく描いている。ただし、この挿絵は、テキスト本文があつてこそ異なる時間軸の出来事が同時に描かれていることを理解できるものであり、テキスト主体の図案といえる。オシウス本で挿絵が変更されたということは、話のテキストをふまえて、シュタインハーヴェル本の図案の方がより適切という判断がなされたからではないか、と考えられる。そして、ネヴェレ本でも同様の判断がなされたのだろう。このとき、ネヴェレ本の挿絵には、本文テキストとは別のものとして、選択的にシュタインハーヴェル本（おそらくドイツ語訳テキスト）にまで遡る挿絵の系譜が存在することになる²⁷⁾。

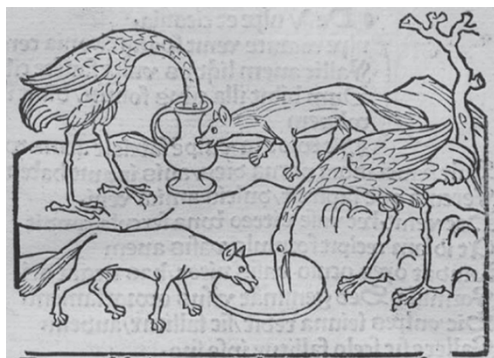


図30 シュタインハーヴェル本「狐とコウノトリ」挿絵

5. おわりに

ここまでネヴェレ本を起点として、近世印刷イソップ本における本文テキストと挿絵の在り方について検討してきた。ネヴェレ本は、おそらく同書刊行より四半世紀以上前に制作された既存の挿絵のストックを利用して挿絵を印刷していたと推測できるが、そのストックとなる挿絵群の形成過程を含め、挿絵とテキストをめぐる複層的な関係があったことは、具体的な検討を通じて明らかにできたと考える。ただし、ネヴェレ本にみられる挿絵の流用や重複利用はネヴェレ本以前からすでに行われており、この点は、当時の出版事情なども合わせて考える必要があるだろう。

なお、本文テキストと挿絵の関係性において、ここまで複雑な状況が発生している一因として、イソップ集ならではの事情もあるのではないかと思われる。すなわち、個々の話が画像化されやすい対象であること、登場する動物や要素等が（一部でも）重なる話が多いこと、一つの話に複数のバージョンが存在することがしばしばあり、翻訳などによる変容も相俟って、とくに近世にはそれらが並存していること、各地でたびたび出版されて普及していたこと、などである。さらに、挿絵そのものに注目すると、挿絵がテキスト本文を元に描かれたと思しき事例のほか、挿絵画家が先行する挿絵の図案を利用している事例も多々見受けられ、テキスト本文とはまた別の、挿絵の伝統とも呼びうるものも生じている。こうした条件が多層的に絡み合い、最終的に本文テキストと組み合わせる挿絵が印刷されたとき、挿絵の図案そのものは、一見すると本文から乖離した誤った挿絵に見えるものも、実はそこにはないテキストに対応したもの、という状態が発生することになる。ネヴェレ本の場合は、そもそも挿絵の制作自体には関与していないという点で、挿絵選択に少なからず本文テキストへの配慮は窺えるとはいえ、おのずと限界があったのである²⁸⁾。

15世紀後半以来、挿絵付イソップ集は各地で多数刊行されてきた。本稿で扱った対象はそのうちのほんの一部に過ぎず、おそらくいまだ筆者が把握していない刊本も多いはずである。その点で、本稿の議論は、数ある道筋のなかの細いかすかな一筋を照射しようと試みたものであ

た。とはいえ、本稿でみえてきように、挿絵の図案が本文テキストと独立して伝統化され、本文テキストと対応しないまま使用された場合、イソップ集のようにテキストが変容しやすい対象では、むしろ挿絵の描写がその後に作られる本文テキストの変容を促す可能性も考えられる²⁹⁾。イソップ集の拡がり大きく、今後さらに追究すべき課題は多いが、とくに近世以降の印刷本イソップ集を考えると、挿絵が持つだろう影響力も考慮に入れる必要があるように思われる³⁰⁾。

注

- 1) ペティグリー (2017), pp.223-225。
- 2) たとえば、いもと (2017)。文・絵ともにいもとの手によるものである。2017年初版、2022年3月で16刷となっており、その人気の高さがうかがえる。
- 3) シュタインヘーヴェル本やその広がりについては、小堀 (2001), pp.149-159、伊藤 (2009), pp.3-4 など。カクストン本はウィリアム・カクストンの手により、マシヨール本からさらに派生したものである。本稿では扱わないが、カクストン本の本文テキストは、*Oxford Text Archive* で各種デジタルデータを参照可能である (<http://hdl.handle.net/20.500.12024/A07095>)。
- 4) 本稿で扱うイソップ集の挿絵のヴァリエーションや重複の数字は、公開されているデジタルデータをもとに筆者が数えたものである。とくにヴァリエーション数や重複数については、筆者が相互に見比べながら数えているため、繰り返し確認はしているものの、微細な誤りがある可能性を予め断っておきたい。
- 5) ネヴェレ本に含まれる⑥ファエドルス集については、拙論 (2023), pp.32 (99) -31 (100) で取り上げた。⑨アプステミウス集は、イタリアの人文学者アプステミウス Laurentius Abstemius (1440 頃 -1508) による *Hecatomythium* (1495 年刊) および *Hecatomythium Secundum* (1505 年刊) に基づくもの。アプステミウス独自のラテン語小話集である。アプステミウス本は 16 世紀を通じてよく印刷され普及していた。ラ・フォンテーヌへの影響も指摘されている (Rolland (2015))。ネヴェレ本の他の箇所については、拙論 (2020), p.242 注 27 も参照。
- 6) 印刷本イソップ集の挿絵については、Harthan (1981), pp.72-77 に 16 世紀から 19 世紀の刊本の挿絵が多数掲載されているが、挿絵入り刊本の説明となり、本稿が問題とするテキスト本文との関係についてはとくに触れられない。また、挿絵については、たとえば Goldman (2013)、エズデイル (1972), pp.143-177 のように、製法を含めた技術的解説もみられるものの、これは必ずしも本稿の関心とは一致しない。一方、イソップ集ではな

いが、揺籃期と16世紀半ばの自然誌・動物誌本に印刷される野兎の挿絵に関して、新しい刊本の図案が古い刊本の図案を元にしてしているとする Blair (2020), pp.174-177 の指摘や、初期のある印刷本における図版の配置について、テキストと「品質も関連性もまちまちな木版図が、ぎこちなく組み合わせられている」とするペティグリー (2017), p.105 の指摘は、当時の挿絵のあり方を考える上で参考になる。とはいえ、これらも簡単な言及にとどまり、実態を解明するには、より具体的な検討が必要と思われる。なお、Suarez (2015), p.209 は、挿絵入り刊本の研究にはいまだすべきことが多いと述べている。本稿もその間隙を埋める一助となればと考える次第である。

- 7) 本稿におけるギリシア語・ラテン語等の翻訳はすべて筆者によるものである。また、各話の概要については、適宜、現在の校訂本、翻訳等に含まれる類話も参照している。
- 8) ソリスについては、O'Dell, Ilse, "Solis, Virgil" in: *Neue Deutsche Biographie* 24 (2010), S. 552-553 [Online-Version] (<https://www.deutsche-biographie.de/pnd118615300.html#ndbcontent>) を参照。
- 9) 1574年のオシウス本については、マンハイム大学の *CAMENA – Corpus Automatum Multiplex Electorum Neolatinitatis Auctorum* にて画像を参照可能である (<https://mateo.uni-mannheim.de/camena/AUTBIO/osius.html>)。
- 10) 1566年本以外にソリスの名は登場しないが、出版地がフランクフルトで共通するほか、巻頭扉絵をみると、1566年本には Weigand Han および Sigmund Feyeraabend、二つの1574年本には Kilian Han の名が印刷されており、関係する者たちの中で版木が引き継がれていたことを推測できる。また、ネヴェレ本には印刷者として17世紀はじめに活動した Nikolaus Hoffmann の名が記されている。何らかの事情で彼の手にもたてられたのであろう。
- 11) ソリスによる『変身物語』挿絵については、ヴァージニア大学の Kinney, D. および Styron, E. によって構築されたウェブサイト *Ovid Illustrated: The Reception of Ovid's Metamorphoses in Image and Text* (<https://ovid.lib.virginia.edu/about.html>) に詳しい。
- 12) 本稿では1547年本未確認のため、1549年の再刊本を参照した。Baron によると、掲載されている挿絵等は1547年本と同一である（本稿注13参照）。
- 13) サロモンに帰される挿絵については、かつて、美術専門家の Baron, R. A. によってウェブサイト上で研究経過が公表されていた。Baron は1960年代後半から1970年代初頭にかけて博士論文執筆のために準備していた内容が中心と述べているが（博士論文は未完成）、サロモンの挿絵付き刊本に関する詳細な調査報告も公開されており、関心のある研究者には非常

に有益だった。残念ながら2016年頃にウェブサイトそのものは消失してしまっただが、ウェブサイトの内容は、現在もインターネットアーカイブ経由で参照できる (*The woodcuts and art of Bernard Salomon*, <https://web.archive.org/web/20160420130423/http://www.studiolo.org/BSProject/BSindex.htm>)。

- 14) Dölvers (1997), pp.54-55。
- 15) コロゼ本と1547年本では正書法の相違からか、綴りやパンクチュエーションに微細な相違がみられる。ここではコロゼ本のテキストに従った。
- 16) ラテン語系・ギリシア語系「犬と肉片」については、拙論 (2020) pp.232-238 参照。
- 17) ドルピウス集については、拙論 (2020), pp.197-198、とくに p.197 注 49。1515年以前の刊本も存在するとされるが、筆者未確認。ここでは、以下の引用テキスト含めて、1515年本を挙げた。
- 18) この点については、Baron の *The Graphic Works of Bernard Salomon*, VIII, Miscellaneous notes and observations に挿絵流用の指摘がみられる (<https://web.archive.org/web/20160420131755/http://www.studiolo.org/BSProject/BSEditionsAesop.htm>)。本稿注 13 で述べたとおり、Baron の記事は本人のウェブサイト上で公開されていたが、現在は失われており、インターネットアーカイブでの参照となる。なお、本稿ではアルチャーティの1548年リヨン刊行本を参照した。
- 19) フランス語版イソップ集では、マシヨール本以前にも本文テキストで「橋を渡る犬」が描写された例が存在する。12世紀末に翻訳されたマリーの『イゾペ』*Ysopet de Marie* である。マリー版では、犬はチーズをくわえて橋を渡っている。ただし、『イゾペ』は16世紀半ばの時点で公刊されておらず、この話にコロゼが触れていた可能性は低いと思われる。
- 20) マシヨール本について、本稿では1484年にリヨンで再刊されたものを参照した。
- 21) マシヨール本巻末に、訳者の名とともに、“Cy finissent les subtilles fables de esope translatees de latin en francoys” の記述があり、ラテン語からフランス語へ翻訳されたものであることが示される。
- 22) 同様のことは、マシヨール本から派生したカクストン本でもいえる。ただし、カクストン本の挿絵は、かなりの劣化コピーとなっている。挿絵画家の技量が問われる部分だろう。
- 23) シュタインハーヴェル本での「水蛇」のラテン語表記は ydrus である。「Tunc iupiter misit illis ydrum misit」(そのときユピテルは彼らに水蛇を送った)。
- 24) シュタインハーヴェル本における「蟬」から「コオロギ」への変更について、明確な理由は不明である。ただ、生物分布等の地域的な事情をふま

えると、「蟬」が出版地周辺で知られていなかった可能性も高く、ドイツ語翻訳にあたってシュタインヘーヴェルが読者向けに昆虫を変更したことも考えられる。プリニウス『博物誌』11.92-95において、*cicada* が蟬やバッタ、コオロギが混ざる形で紹介されており、1443年にパドゥアで医学の学位を取得したシュタインヘーヴェルが、その影響を受けて「コオロギ」としたのかもしれない。

- 25) *fromis=formis=fourmy (=fourmi)*。綴りの揺れがあるが、いずれも蟻を示す。
- 26) ネヴェレ本の挿絵(図4)ではVSモノグラムがあるため、ソリスの挿絵であることは確かである。一方、筆者が確認したソリス系挿絵掲載の3種のイソップ集で、この挿絵は使用されていない。未確認のものがある可能性は否めないが、もしネヴェレ本で初出であったとすると、実際に印刷で使用されたもの以上にソリスが図版を制作しており、その版木が印刷業者のストックに含まれていた、と考えられる。
- 27) なお、ネヴェレ本の挿絵で、サロモンの挿絵に由来しない図案については、シュタインヘーヴェル本挿絵の図案を元にしたと思しきものが散見される。その点からもソリスの参照元にシュタインヘーヴェル本(あるいはマシヨ一本)があったことは確実である。そのなかでも「狐とコウノトリ」の挿絵は、シュタインヘーヴェル本の系譜がより積極的に活用された事例といえることができる。ただし、図案の選択は印刷業者側に委ねられていた可能性も高く、挿絵画家自身がテキストから判断したことを示してくれるわけでもない。
- 28) 本稿では扱うことができなかった、こうした対応しない本文テキストと挿絵を提示された読者側の意識も興味深いところである。読者は、そういうものとして理解し、あまり深刻に考えなかったのか、あるいは本文テキストと挿絵を切り分けて考えたのだろうか。
- 29) 本稿で示したコロゼ本のタイトルの例のほかにも、たとえば1547年にルーアンで刊行されたフランス語版イソップ集では、「蟻と蟬」の話が「蟻とバッタ」(*d'un fourmy & d'un criquet*)とされる。挿絵はコロゼ本のもの(図24)が流用されており、図案と本文テキストの一致が図られているようにみえるが、あるいは、それこそコロゼ本のタイトルが影響したのかもしれない(その場合も、虫の種類は変更されていることになる)。
- 30) 本稿は科学研究費助成事業(若手研究21K12970)による助成の成果を含む。

参考文献

- Alciat, A. (1548) *Les Emblèmes*, Lyon.
Blair, A. (2020) "Managing Information" in Raven (ed.), pp. 169-194.

- Corrozet, G. (1542) *Les Fables du très ancien Esope Phrygien*, Paris.
- Dölvers, H. (1997) *Fables Less and Less Fabulous: English fables and parables of the nineteenth century and their illustrations*, London.
- Dorpius, M. (1515) *Fabularum Quae hoc libro continentur, interpretes atque authores. . .*, Straßburg.
- Gibbs, L. (2008) *Aesop's Fables*, Oxford World's Classics, Oxford.
- Goldman, P. (2013) "The History of Illustration and its Technologies", in Suarez & Woudhuysen (eds.), pp. 231–244.
- [Han, K. ed.] (1574) *Aesopi Phrygis Fabulae, Elegantissimis Eiconibus ueris animalium species ad uiuum adumbrantes*, Frankfurt.
- [Han, W. ed.] (1566) *Aesopi Phrygis Fabulae, Elegantissimis Eiconibus ueris animalium species ad uiuum adumbrantes*, Frankfurt.
- Harthan, J. (1981) *The History of the Illustrated Books: The Western Tradition*, New York.
- Haudent, G. (1547) *Trois cent soixante et six apologues d'Ésope: traduits en rithme françoise*, Rouen.
- Hausrath, A. (1957–9) *Corpus fabularum Aesopicarum*, vol.1, fasc. 1–2, Leipzig.
- Hervieux, L. (1894) *Les Fabulistes Latins: depuis le siècle d'Auguste jusqu'à la fin du moyen âge*, II, Paris.
- Howsam, L. (ed.) (2015) *The Cambridge Companion to the History of the Book*, Cambridge.
- Macho, J. (1484) *Fables d'Ésope*, Lyon.
- Nevelet, I. N. (1610) *Mythologia Aesopica*, Frankfurt.
- Osius, H. (1574) *Phryx Aesopus Habitu Poetico*, Frankfurt.
- Österley, H. (1870) *Romulus: die Paphrasen des Phaedrus und die Aesopische Fable im Mittelalter*, Berlin.
- Österley, H. (1873) *Steinhöwels Äsop*, Tübingen.
- Perry, B. E. (1952) *Aesopica*, Urbana.
- Perry, B. E. (1965) *Babrius and Phaedrus*, Cambridge.
- Raven, J. (ed.) (2020) *The Oxford Illustrated History of the Book*, Oxford.
- Rolland, T. (2015) "Le destin facétieux des fables, d'Abstemius à La Fontaine. Croisements génériques et déplacements poétiques (XVe–XVIIe siècles)", *Le Fablier. Revue des Amis de Jean de La Fontaine*, n° 26, pp. 53–85.
- Steinhöwel, H. (1476) *Aesopus: fabulae*, Ulm.
- Suarez, M.F. & Woudhuysen, H.R. (eds.) (2013) *The Book: A Global History*, Oxford.
- Suarez, M.F. (2015) "Book history from descriptive bibliographies", in Howsam (ed.), pp. 199–218.

- [Tournes, J. ed.] (1549) *Les Fables d'Esopé Phrygien, mises en Ryme Française*, Lyon. (repr. of 1547.)
- [Tournes, J. ed.] (1551) *Aesopi Phrygis Fabulae Elegantissimis Eiconibus ueris animalium species ad uiuum adumbrantes*, Lyon.
- 伊藤博明 (2009) 「ボッジョ・ブラッチョリーニと『伊曾保物語』——シュタインハーヴェル編「イソップ寓話集」のスペイン語版について」、『埼玉大学紀要(教養学部)』45(2)、1-15頁。
- いもとようこ (2017) 『イソップどうわ』、金の星社。
- 岩谷智・西村賀子 (1998) 『イソップ風寓話集 パエドルス／パプリオス』、叢書アレクサンドリア図書館第10巻、国文社。
- エスデル, A. (1972) 『西洋の書物』(R. ストークス改訂、高野彰訳)、雄松堂出版。
- 小堀桂一郎 (2001) 『イソップ寓話 その伝承と変容』、講談社学術文庫 1495、講談社。(原本 1978 年)
- 中務哲郎 (1999) 『イソップ寓話集』、岩波文庫、赤 103-1、岩波書店。
- ペディグリー, A. (2017) 『印刷という革命：ルネサンスの本と日常生活』(桑木野幸司訳)、白水社。
- 吉川斉 (2020) 『「イソップ寓話」の形成と展開——古代ギリシアから近代日本へ——』、知泉書館。
- 吉川斉 (2023) 『近世印刷本ファエドルス集の構成について』、『成城文藝』261、51(80)-28(103)頁。

図版出典

本稿では、7種の近世印刷本イソップ集より30枚の図版を引用している。以下、各図版の出典を示す。

1476年シュタインハーヴェル本(図17, 図19, 図23, 図30)

Steinhöwel, H. (1476) *Aesopus: fabulae*, Ulm.

<https://www.digitale-sammlungen.de/en/view/bsb00024825>

Bayerische Staatsbibliothek, CC BY-NC-SA 4.0 Deed

1484年マショー本(図18)

Macho, J. (1484) *Fables d'Esopé*, Lyon.

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k1521499r>

Bibliothèque nationale de France, Public domain

1542年コロゼ本(図12, 図15, 図20, 図24, 図27)

Corrozet, G. (1542) *Les Fables du très ancien Esopé Phrygien*, Paris.

<https://mdz-nbn-resolving.de/urn:nbn:de:bvb:12-bsb10169536-0>

Bayerische Staatsbibliothek, NoC-NC

- 1549 (1547) 年サロモン挿絵本 (図 13, 図 16, 図 21, 図 25, 図 28)
[Tournes, J. ed.] (1549) *Les Fables d'Esopé Phrygien, mises en Ryme Française*, Lyon.
<http://diglib.hab.de/drucke/li-63-2/start.htm>
Herzog August Bibliothek Wolfenbüttel, Public Domain
- 1566 年ソリス挿絵本 (図 6, 図 9, 図 11, 図 22, 図 26, 図 29)
[Han, W. ed.] (1566) *Aesopi Phrygis Fabulae, Elegantissimis Eiconibus ueris animalium species ad uiuum adumbrantes*, Frankfurt.
<https://mdz-nbn-resolving.de/urn:nbn:de:bvb:12-bsb10171939-5>
Bayerische Staatsbibliothek, NoC-NC
- 1574 年ソリス挿絵再刊本 (図 7, 図 10)
[Han, K. ed.] (1574) *Aesopi Phrygis Fabulae, Elegantissimis Eiconibus ueris animalium species ad uiuum adumbrantes*, Frankfurt.
<https://mdz-nbn-resolving.de/urn:nbn:de:bvb:12-bsb00015249-9>
Bayerische Staatsbibliothek, CC BY-NC-SA 4.0 Deed
- 1610 年ネヴェレ本 (図 1, 図 2, 図 3, 図 4, 図 5, 図 8, 図 14)
Nevelet, I. N. (1610) *Mythologia Aesopica*, Frankfurt.
<https://mdz-nbn-resolving.de/urn:nbn:de:bvb:12-bsb10234517-2>
Bayerische Staatsbibliothek, NoC-NC